大谷大学教職支援センター　　発行日 2011.1.20　第93号

教員養成ナビゲーター

大谷教師塾

教職支援センターだより「大谷教師塾」は本学ホームページにも掲載を予定しております。

目次：

・「人権学習」の思い出　1
・みなさんに伝えたいことは山ほどあります　1
・肌で感じた思考力育成への取組　2
・先生方と子どもたちの出会いは私の心の支え　2
・卒業生実践報告会　3
・祝現役合格　3
・［京都市教師塾］出前講座　4
・読書案内　4

「人権学習」の思い出

センター員　大秦　一浩

いつものように地下鉄に乗車し，ふと顔を上げると，吊り広告に交じって「人権啓発ポスター」のあることに気づきました。文面には「人権ゆかりの地」という言葉が見え，背景は大堰川の風景写真でした。一見して「渡来人」が主題であることは察せられ，その刹那，ポスターから目を背けた私は，自分が目を背けたということに驚いて，もう一度ポスターを見つめました。表現はあくまでも穏和，押し付けがましさはなく，作成者の真摯な姿勢が自然に伝わる内容でした。私は，自分の不可解な行動に苦笑しそうになりながら，さらに不可解なことに，もはや忘却の淵に沈んでいたはずだった小・中学生のころの或る情景を思い出していました。

私の通った小学校も中学校も，人権教育に熱心だったと思います。先生方は，命の尊さについて抽象論を唱えるのではなく，自分たちが生きている世の中の今の問題として，私たちに語りかけて下さいました。詳細は憶えておらぬのですが，先生方のお話は，歴史的，社会的な背景をふまえた，客観的な述べ方で，様々な知識を現実の問題にどのように活かすべきか，かなり本質的な，従って子どもの頭には難しい内容であったように思います。しかし，みんな一所懸命に聞いていました。

人権学習のなかで，よく採り上げられていたのは，地域的な問題や民族的な問題でした。とりわけ，わが国が当事者であった大陸侵略と，その結果生じた民族的な差別問題は丁寧に扱われており，古代のわが国が周辺地域と親密な関係にあったことをふまえ，差別の愚かしさが示されていました。日本文化が，大陸渡来の文化の影響を受けており，わが国はこのことを徳とすべきである旨，社会科でも教わっていました。

そんな時，殆ど必ず，私の名前が出てくるのです。私のはるか遠い祖先が渡来人であろうとの説明もあわせて。

あれは，いかなることだったのだろうかと，いま素朴に不思議に思い出されます。私の名が呼ばれたときの，先生のご様子，友人たちの反応，教室の雰囲気を，あたかも教室の真上から見下ろすかのように，私は鮮明に思い出せるような気がします。ただし，その場に私自身は見出せない。そのときの私がどのようであったのか，まったく記憶に思い当たりません。

以上，つらつら思いつくままに書き散らしました。教育に関する建設的批判や具体的提言など一切ない，標題の通りの，ただの所感です。教師を志す方の参考にもならないことかと思いましたが，こんなこともあるということを，そのままに書きました。行間お汲み取りいただければ幸甚です。

■ みなさんに伝えたいことは山ほどあります （4）

教職アドバイザー　細谷　僚一・西寺　正

2011年度教員採用選考試験についての受験生アンケートをとりました。その反省で最も多いのは，取り組むのが遅すぎたという点です。ほとんどの学生は忙しい日々をおくっているように思います。大切なことは，日々の生活に追われるだけではなく，卒業後の職業選択や決定についての長期的な展望やその実現のための計画的な準備についても関心を払うことです。

「もう少し早く相談に来てもらえれば」アドバイザーとして，こんな風に思うこともしばしばです。

教職を目指す皆さんにとって，教職支援センターの活用は必修と考えてください。足を運ぶごとに，確実に展望が開かれてくるはずです。

子どもたちの思考力育成のために

▼

① 学びの観点を明確にする

② プラス面とマイナス面の両面から考えさせる

肌で感じた思考力育成への取組

ー　小中一貫コミュニティ・スクール研究発表会に参加して　ー

教育･心理学科　第2学年　伊吹 飛馬

11月12日に京都御池中学校で行われた小中一貫コミュニティ・スクール研究発表会に参加しました。京都御池中学校は，ＯＧＴプロジェクトといって3校（御所南小・高倉小・京都御池中）が協力して小中連携を行っている学校です。京都市の中でも先進的な取組を行っているこの学校で，どのように授業がおこなわれているのか楽しみにして参加しました。

公開授業では，9年（中学3年）の国語科を見させていただきました。授業の展開となる部分では，4人1組になってグループ学習に取り組んでおられました。教科書の「故郷」の登場人物について分かることを生徒が役割分担して，付箋紙に書き上げたことをプラス面とマイナス面，昔と今に分けて模造紙に貼り，そこから構造化していくという形をとっておられました。その時の教師の活動としては，構造化したものが抽象的なものであった場合は，具体化するように指示されていました。そのことから，観点を挙げて構造化するグループ活動を私も将来取り入れてみたいと感じました。

その後に行われた井上一郎先生の講演では，ラーニングスキル向上のために，子どもをどう指導するのか，子どもがどういう方法で学ぶかが大切だとおっしゃっていました。TIMSS調査（国際教育到達度評価学会の調査）の結果に関しては，日本の子どもたちは物事を批判する能力が弱いことを指摘されていました。

今回の研究発表会に参加して，頭の中に強く刻まれたことは，学びの観点を明確にし，プラス面とマイナス面の両面を考えるように指導することでした。この取組が，子どもたちの思考力育成につながるのだと解釈しました。

私が2年後，教育現場に立った時には，今回学んだことを実践したいと考えました。

小中連携モデル校でのボランティア

● 小学校では

・できるだけ子ども達と関わる時間をもつ

● 中学校では

・先生方の即時対応の的確な指導から学ぶ

先生方と子どもたちの出会いは私の心の支え

ー　ボランティア活動　ー

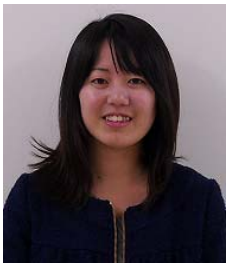
文学科第3学年　藤 熊　梓

私は現在，宇治市立南小倉小学校と西小倉中学校で学生ボランティアをしています。私は中学校の教師を目指す上で，小学校の教育現場の様子も見て学びたいと常々考えていました。その中で，小中連携の取組がなされている京都府のモデル校であるこの二校にボランティアとして行ける機会を得ました。

まず，南小倉小学校では授業中の学習補助や給食指導，特別支援が必要な子ども達と関わるなど，様々な活動をしています。勉強が苦手な子や，給食が食べられない子ども達に声掛けをしたり，休み時間には外に出て鬼ごっこや大縄をして一緒に遊んだりして，出来るだけ子ども達と関わる時間を増やせるよう積極的に取り組んでいます。

西小倉中学校では，主に学習補助や部活指導に関わっています。部活指導では陸上部に参加し，生徒と一緒に走ったり競い合ったりしています。私自身が中学，高校時代に陸上部に所属していたこともあり，経験を生かして生徒とのコミュニケーションをとることを心がけています。また，思春期の難しい時期にある生徒との関わり方を考える時，先生方の即時対応の的確な指導を身近に見られることは，私にとってとても勉強になっています。

ボランティアをやっていく中で，多くの先生方や生徒達との出会いがあります。この様に私は今，多くの経験を積み重ねることで，日々私自身の成長を感じています。そして，子ども達と触れ合うことで，さらに教師になりたいという思いが強くなり，ボランティアでの出会いが私の支えにもなっています。



これらの経験を生かして，将来の目標に向かってさらに努力していきたいと思います。

京都市立小学校

祝 現役合格

（名簿搭載）

私を育て支援していただいた多くの方々の期待に応えるために，全力を尽くしたいと思っています。

文学科 第４学年 堀岡　亜衣子

■卒業生実践報告会 12/8■

・今の努力が将来の財産になる

田口先生

教育･心理学科　第2学年　前川　瑠美

小学校教諭を目指す私にとって，今回の報告会は，自分を見つめなおし，毎日の大学での授業と，教員採用選考試験に向けての取組について考える機会となり，大きな意味をもつものになりました。

田口先生は，現在京都市の小学校で４年生の担任をされており，日々子どもたちと接し，授業をしておられます。講師経験を重ねる中で，「今は授業をするのが本当に楽しいです。“授業で子どもを変える！”ということを他の先生方と共に目標に掲げ，諦めずに取り組んでいます。」とおっしゃっておられました。

私は，現在2年生で，様々な教科の教育法で，模擬授業を受けたり，グループになって行ったりしています。指導案を作成するために，資料を選択し，授業の構成はどうあるべきかを話し合い，自分たちの持っている力を全てつぎ込んで，準備を行います。しかし，実際に授業を行った後は，後悔と反省ばかりで，授業をつくるというのは，とても難しいと痛感しています。今回，田口先生のお話の中で，「指導案を作り，模擬授業をすることはとても苦労もあるし，大変なことだと思います。しかし，今，その経験をしていることが教師の力量，指導力となって教師になった時，きっと自分の財産になります。」という言葉を聞き，とても励みになりました。これからは，少し考え方を変えて，授業づくりの過程全てが自分たちの力になり，その事がこれからの財産になると思いながら授業を受けたいです。

教員採用選考試験の対策として，田口先生は今までに作った何十冊もの自筆のノートとプリントを見せて下さいました。そして自身の勉強スタイルを教えてくださいました。課題やレポート，模擬授業などに時間をとられ，自分の勉強が出来ていないと感じていたので，田口先生のノートとプリントの量には正直圧倒されました。「時間がない」と言い訳するのではなく，「時間をつくる」ようにし，少しずつでも，自分の勉強法を確立していきたいと思います。

学校での授業や，ボランティア活動，「京都市教師塾」も含め，様々な経験をし，教師になるための実践力を身につけていきたいと考えています。貴重なお話をありがとうございました。

・人とのつながりが自分の力につながる

宮迫先生

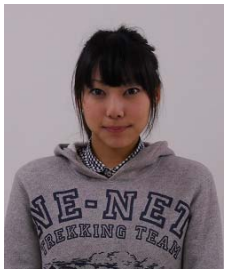
文学科　第3学年　三宅　良美

大谷大学を卒業され活躍されている講師の先生方のお話を聞くことができ，本当によかったです。同じ大学で同じ夢の実現を目指し学んできたという共通点があり，とても身近な話として聴くことができました。そして，話を聞き終えたとき，リアルに自分の感情，意識が変化したことを実感できました。

宮迫先生のお話は教育現場に自らどんどん飛び込んでいく大切さ，人間のつながりの大切さなど自分の経験を踏まえ話してくださいました。早く現場に出て自分の力を見きわめ自信をつけたかったとおっしゃっていました。また，学校ボランティアでは，明確な目的意識をもつことの大切さに気づかされました。私も，図書館ボランティアや土曜学習などのボランティアにいかせて頂いたり，「京都市教師塾」に通っていたりしています。いずれにしても与えられた場を有効的に活用していくべきだなと思うようになりました。その現場での人とのつながりや経験が今後の自分を支えていく大きな財産になるように思います。そして，学生時代での教育現場を含めた様々な経験を重ね，貪欲にいろいろなことを吸収することが教師になったとき生きてくると思います。

また，宮迫先生は大学の硬式野球部にも所属されていたのにも関わらず学校ボランティアもされ，バイトもこなすなど本当にハードな生活だっただろうなと考えます。時間が無いからとつい思いがちですが，時間は自分で作るものだなと改めて考えさせられました。自分で勝手に線引きして挑戦しないこと，諦めがちなことなどに対しもっと積極的に挑戦していくべきだなと思いました。

このお話から教員採用選考試験に合格するために大切なことは，仲間と高めあうことだなと改めて感じました。この報告会を学生仲間と実際，一緒に勉強する機会を作ろうと動き始めたり，みんなが不安に感じていたことなど共感できたり，この報告会を受講した学生の意識の変化，仲間意識の高まりなども感じられることができました。またこのような機会があれば，少しでも多くの人に参加してほしいなと思います。



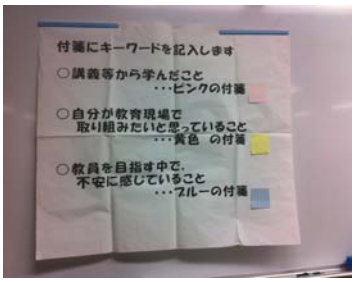
■ [京都市教師塾]出前講座 ■

浦一夫･上原菜穂子両先生を京都市教育委員会から迎え，
1）講義（浦先生）
2）グループ討議
（上原先生の主導）
3）全体での意見交流
（左の写真）の３つのセッションでの「京都市教師塾」の出前講座が実施されました。（平成22年12月22日）

浦先生の講義テーマは，「子どもとともに学びながら～教師のやりがいを感じつつ～」でしたが，事後アンケートの感想は「教育現場での"出会い"を大切にする，という話がよく分かりました。"出会い"は教育現場によく似合う言葉だと思います」「人のつながりを軸に，よりよき授業を作り上げる教師という仕事にますます魅力を感じた」という感想とともに，「授業で（生徒は当然ながら）先生も成長する」というお話の内容が印象的でした。

次いで，上原先生の主導によるグループ討議です。

まず，4～6人の小グループに分かれて役割分担（司会者･発表など）をしっかりと確認しながら，浦先生の講義のテーマを各班で深めます。今回の「教師塾」のグループ討議の工夫は，自分の意見のキーワードを手持ちの三色の付箋紙に記入し各班に配布された大きな模造紙に貼付し，お互いの意見を整理しつつ共通項を見出しながら討議を深めていく手法です。

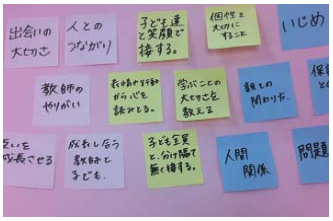


三色の付箋に書く内容の指示（右の写真）は次の通りです。

1）ピンクの付箋には：本日の講義から学んだこと。

2）黄色は，自分が教育現場で取り組みたいと思っていること。

3）青色には教員を目指す中で，不安に感じていることの核心をそれぞれの付箋に簡潔に書いていきます。（下の写真）



グループ討議は，全体での意見交流も含め45分間の比較的短い時間でしたが，参加者の事後アンケートを読むと内容の充実した話し合いができたとすこぶる好評でした。

講義や討議の目当てが参加者にとって付箋を用いる新しい手法で自分や他者の意見や論点がより明確になって，お互いの付箋の読み合いや意見の統合の『作業』を通じて，付箋が小グループでの話し合いのよき羅針盤の役割を果たしたと思いました。

グループ内での集中した論議を全体に広げる熱心な意見交流では上原先生の見事なマイク捌きもありましたが各班の代表者は，講義テーマを踏まえ，教員志望の大谷大学の学生としての「よさや可能性」が大いに発揮されたと思います。

今後とも，このような講座を活用し，教員志望者としてさらに実力をつけてください。（西寺）

■ 読書案内　仏教学科 第1学年 三村　覺

「日本辺境論」　内田　樹 著

新潮新書

「日本人とは？日本とはどんな国ですか？」
こう聞かれてあなたは胸を張って答えることができますか？

本書では，日本人は辺境人であるというところからスタートし，様々な論文や過去の文献を下敷きにしながら，辺境人に至る経緯や所以などを述べたものです。

辺境人とは，どこかにある中心との距離を考えながら，常にその周辺・周縁に位置し，それに基づいてしか意思決定できない存在であると述べられています。つまり，他に規範を求めなければ，他と比較することでしか自分を語れないということです。しかし，皮肉なことに他を追い越してしまうと，思考停止に陥ってしまう。これが内田さんの述べる辺境人です。

そのため，日本人は絶えずキョロキョロしながら模範となるものを探している。それはファッションや食べ物であったり，教育方針であったりとさまざまです。

内田氏は

> 私たちは不安でしかたがない。日本人であることはどういうことなのか，私たちは確信を持って言うことができないからです。「どういうふうにふるまうのが日本人らしいのだろうか」ときょろきょろあたりを見回して，「日本人の標準的なありよう」って何だろうと思量している。でも，国民的合意はどこにもない。その不安がつねにつきまとっている。」

とまとめています。

日本人を自分に置き換えて読んでみても，確かにそうだなと納得させられるところが多々あります。自分の主張や意見を述べる前に，前例や模範となるものがなければ不安がつきまとう。自分と同じ意見を持つ人が他にいないわけではないけれど，「私はこう思う」と胸を張って言うことができない。常に，正しいであろうというモデルに依拠し，それへの同調と批判という形でしか意見できない。私もそんな辺境人の一人であると気付かされました。

冒頭の質問にハッとさせられた人にはオススメの一冊です。